

令和元年 会長あいさつ

生命を育む教育の創造を目的に掲げ、「教育には下限はない」という主張を訴え発足した本会は、本年度をもって満50年という節目を迎えました。時も元号が令和と改元された記念すべき年です。そこで本年度のメイン事業として本会と最も縁の深い日本アビリティーズ協会会長の伊東弘泰氏に午前中に記念講演をしていただくことになりました。午後のパネルディスカッションは、本会の目的の一つでもある多様性社会の実現を取り上げ、テーマを「一人ひとりが主体者となれるダイバーシティと多職種連携」としました。

「一人ひとりが主体者」になれるとは、何ものにも囚われない個としての主体者になれるということでもあります。一方ダイバーシティへのアプローチは、群れの存在の在り方そのものの追求であります。一見、対立項にある追究課題であるように見えますが。果たしてこの対立項は、共立できるでしょうか？

また、「ダイバーシティは、各個々がそれぞれのアイデンティティを維持しながら、相互に尊重し合いながら存立する。」とあります。それでは、ダイバーシティの中身を問うてみることにします。

単独社会（企業体）は、営利を目的としてダイバーシティを形成しようとしています。これ自身は、社会発展のためということで、特に問題はないのですが。その中に、有用的労働の叶わない人々が含まれているのでしょうか、地方公共行政がその人たちをカバーしたダイバーシティを形成しようとしています。さらに、その中に無告の人（日常的継続的に支援を必要とする人々）が含まれているのでしょうか。我々がめざすダイバーシティは、すべての人々が存在できるダイバーシティです。

例えば、それは、AがBを支え、BがCを支え、CがDを支え、DがEを支え、EがAを支え合うといった連環系を取り、軸となるGがA・B・C・D・Eと、全てと結びついている。いわば、中心軸にスポーク（車輻）で結びついて数珠のような構造をイメージしています。

そのような多様性社会が形成されたとき共生社会の構築が現実のものとなることが考えられます。今回は、対立項の繋ぎ目(数珠の紐)として多職種連携をフォーラムのテーマとして取り上げました。

学校教育サイド：「東京都立特別支援学校の就労支援における多職種連携について」

東京都立青鳥特別支援学校教諭 後藤 貴久 氏

福祉行政サイド：「『葛飾区手話及び障害の特性に応じた多様なコミュニケーション手段の利用の促進に関する条例』における、多様性と多職種連携の可能性について」

東京都葛飾区障害福祉課相談係長 星 茂行 氏

高齢者福祉サイド：「高齢化社会福祉が捉えたダイバーシティと多職種連携について」

東京未来大学教授 高橋 一公 氏

進路支援、福祉行政、高齢者福祉等々、繋ぎ目の紐がそれぞれ関連し合い結びついて、Gの存在が明らかになっていったとき、我々のめざすダイバーシティが浮かび上がってくると思われれます。

そして、本フォーラムが契機となって個と群れの二立項の矛盾が止揚されることを願っています。

日本重複障害教育研究会会長 猪瀬義明